BULGERIA

ブルガリア共和国

「旧社会主義国家である国で、歴史的観光施設を中心に都市ごとの立地調査を行う」

国際観光学科　山田敦大

Sofia

ソフィア到着（2/6～）

初海外へ

約16時間のフライトからイスタンブールに到着。トルコ・シリアを震源とする大地震が起きた４時間後に飛行機は降り立ちました。ブルガリア行きの飛行機が２時間後を控える中、２時間遅れでブルガリアへ。計４時間の乗り継ぎ待ちからブルガリア発。トルコの地震を知ったのはブルガリアホテルに到着してからでした。

ブルガリア初日

ホテルには午後到着し、メインストリートの「ヴィトシャ通り」を散策。日本と比べ建物が古く閑散としている場所も多く、壁にはウォールアートが目立ち治安の善し悪しが伺える。のちに見慣れた景色になるのだが、初めのころは少し怖い印象があった。

空港からホテルまではタクシーを使ったが、少しやんちゃできつめなタクシーに乗車してしまった。もとより20Lv（約1400円）の支払いだったが、到着すると25Lvと言われ、早速ブルガリアの洗礼を受けてしまった。後日談だが、正規料金は15Lv。初日からだいぶ損してしまったが、苦い経験も一つの醍醐味として、良い経験になりました。

2/7~2/12（ソフィア探索）

首都ソフィア

翌朝、朝5時からソフィアの街は動き始めます。
ソフィアには住民の足となるトラムが町中を走ります。市内には遊歩道も多く、ヴィトシャ通りをはじめ多くの場所で車の立ち入りを禁止する道路が見られました。

街を歩くと色々なものが目に入ります。中心街には2000年代に入り、地下鉄の掘削作業中に見つかった「セルディカの遺跡」があり、現在も掘削中で現場はトタン板で仕切られています。
右の画像は、右側から旧共産党本部・奥がホテル・バルカン（ロの字型のホテルで、中にブルガリア正教の教会がある）左は現在の大統領府です。正面には「セルディカの遺跡」の他に、ブルガリアの母の像、聖ネデリャ教会があり、地下鉄駅「セルディカ」からも駅構内に遺跡が至る所で見ることができます。

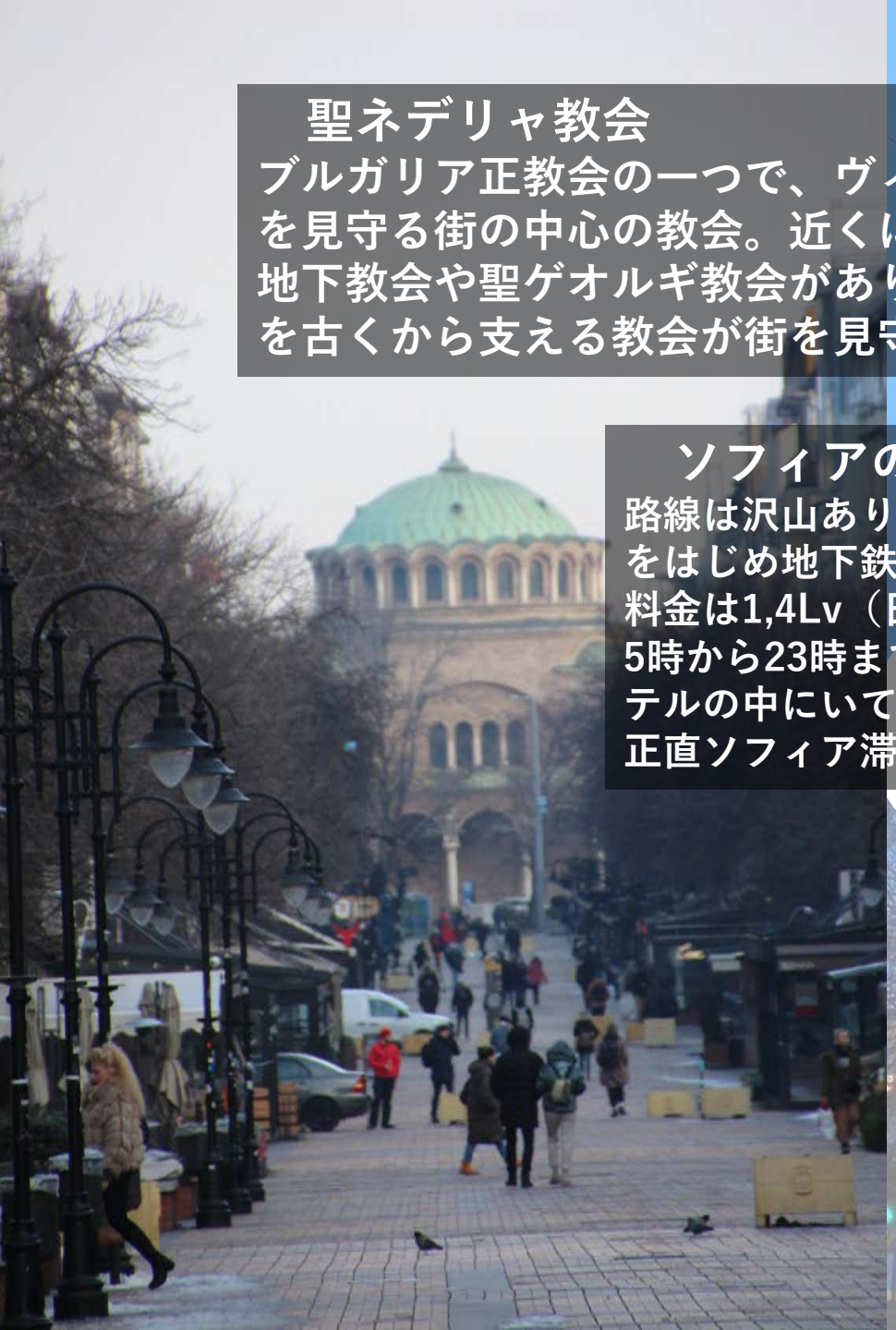
街の中心には昨年から閉鎖されてしまった「セントラル・ハリ」と呼ばれる大衆向けの大規模な八百屋市が毎日開かれており、現在では北部「ジェンスキ・パザル」で毎日朝4時から野菜などの市場が開かれています。

私にとって初海外。発展途上国としての街並み？社会主義の面影がある街並み？目の付け所に迷いながらも、普段とは違う、今までスマホで見てきた海外とは少し違う海外に戸惑いながらも、今回の旅がスタートします

最初の一週間でインタビューしてくれた人たち

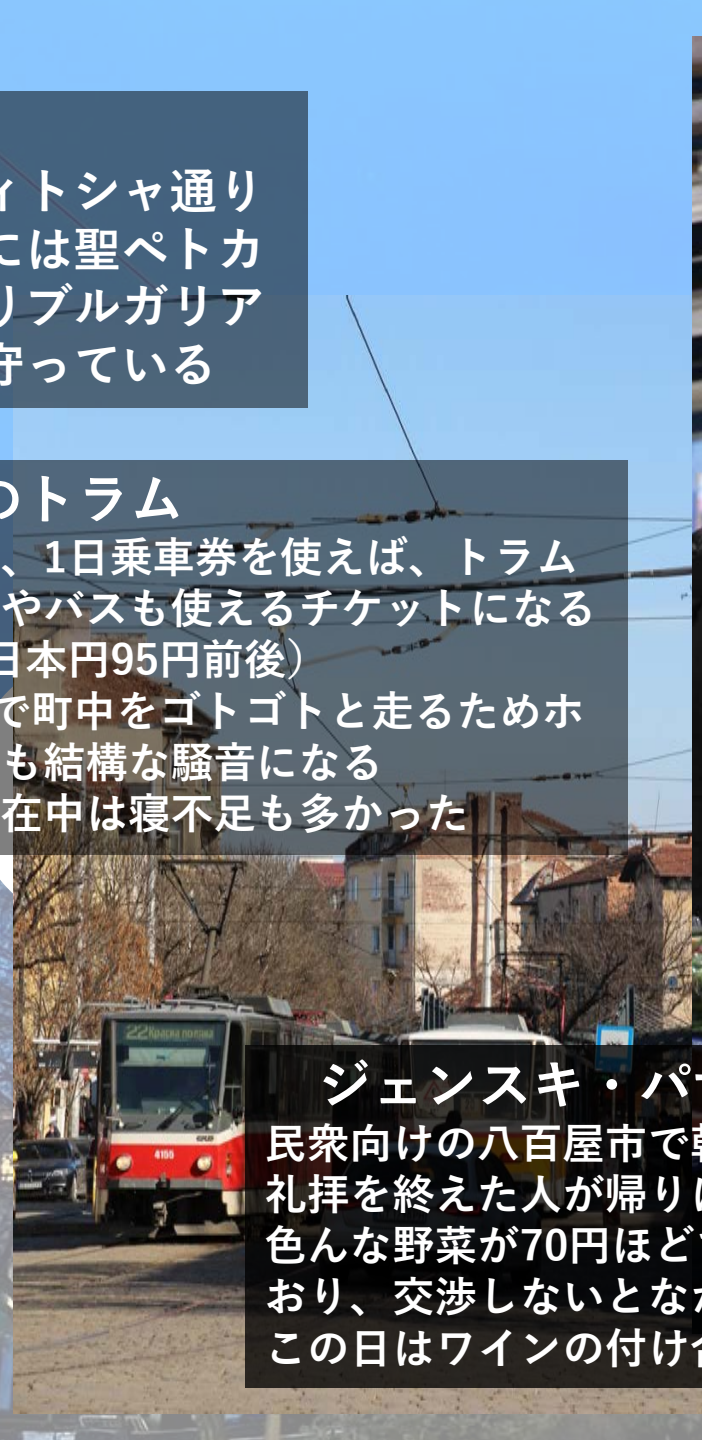
セルディカの遺跡

ソフィア中心地にあり、一部露呈化されている。立ち入りは自由で、地下鉄に乗るために通る道として活用されている。右側には道路が走り、町の中心に立地していることが見て取れる。更には道路の下にも遺跡はあり、入場料（学生２Lv：日本円140円）を払うとだれでも自由に見る事ができる。
歴史的にみると古代の遺跡。2~14世紀のものと見られ、当時のローマ帝国時代に深く関係する遺跡だとみられている。現在も至るところで発掘されており、町の中心部のみならずソフィアの至る所で発見されている。
展示室の中には床一面にモザイクが施されている箇所もあり、観光地としての目玉にもなっている。観光の観点からは注目度が低かったのが難点。市民はもとより観光客が少なく、施設内は閑散としていた。しかし、ブルガリアの国全体としてみても新たな観光地としての要素や地域ごとにセルディカに関連しそうな建築物が多く見つかっていると感じたことから、今度の発掘調査からまた新しい成果により、世界的に注目度が増していくと予想している



聖ネデリャ教会

ブルガリア正教会の一つで、ヴィトシャ通りを見守る街の中心の教会。近くには聖ペトカ地下教会や聖ゲオルギ教会がありブルガリアを古くから支える教会が街を見守っている



ソフィアのトラム

路線は沢山あり、1日乗車券を使えば、トラムをはじめ地下鉄やバスも使えるチケットになる
料金は1,4Lv（日本円95円前後）
5時から23時まで町中をゴトゴトと走るためホテルの中にいても結構な騒音になる
正直ソフィア滞在中は寝不足も多かった

ジェンスキ・パザル

民衆向けの八百屋市で朝早くから多くの人で賑わっている。朝の礼拝を終えた人が帰りに朝ごはんを買うイメージがほとんど。
色んな野菜が70円ほどで売られているが、1キロ～の値段となっており、交渉しないとなかなか1つだけでは売ってもらえない。
この日はワインの付け合わせのナッツを購入（1キロ）

ボヤナ教会【世界文化遺産】

ソフィア中心部から地下鉄とバスを乗り換え1時間30分ほどで到着。城壁で囲まれ、教会内部の写真撮影は禁止されている

フレスコ画で世界的に有名なボヤナ教会は11世紀に創建。教会内部は3つのパートに分かれた壁画絵になっており、奥に行くほど年代の古いものになっている。絵の表現がほかの教会と比べ豊か。24日にもう一度訪れた際に聞いたガイドからは「中世ブルガリア美術の最高傑作」と評されるほどだという。

教会内部は入場制限がされていて、1度に10人以上入ることは許されていない。そして驚いたことに、ここには日本語ガイドが置かれていたため、英語圏はもとより日本人にも優しい世界遺産になっている。

Veliko Tarnovo

丘の街ヴェリゴタルノヴォへ

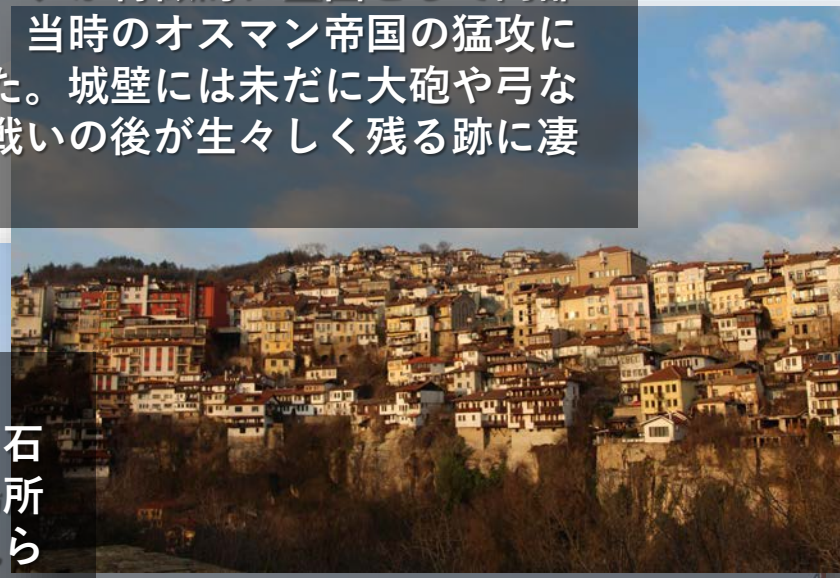
今回の旅の第2の街ヴェリゴタルノヴォに向かいます。ヴェリゴタルノヴォは大相撲琴欧州関の出身地。ソフィアのアフトガーラ（バスターミナル）に向かいます。バスに揺られること3時間半。通称断崖の街「ヴェリゴタルノヴォ」に到着。現地に着くと、ホテルまでのタクシーの気配がなく丘の上にあるホテルまで35キロのスーツケースを持って歩きます。この旅で一番きつかったことでした。

ヴェリゴタルノヴォ

ホテルに到着すると、丘の街の全容が見えてきます。ここはブルガリアの最も人気な観光地。ホテルのある「ニコラ・ピトロ通り」はこの町の中心となっており、「サモヴォドスカ・チャルシ」と呼ばれる古くから陶器や織物で盛んな職人街が見られます。東西に広がる職人街。東方面に抜けると「ツァレヴァレの丘」に入り大司教区教会が見えてきます。歴史的には1187年～1393年の第二次ブルガリア帝国期の首都にもなった街なみは丘に沿って建てられることから、観光客の間では「朝焼けに照らされる町」としても有名。朝になると大勢の訪問客がカメラを持って、町の至る場所にある撮影スポットに訪れていたのが印象的でした。

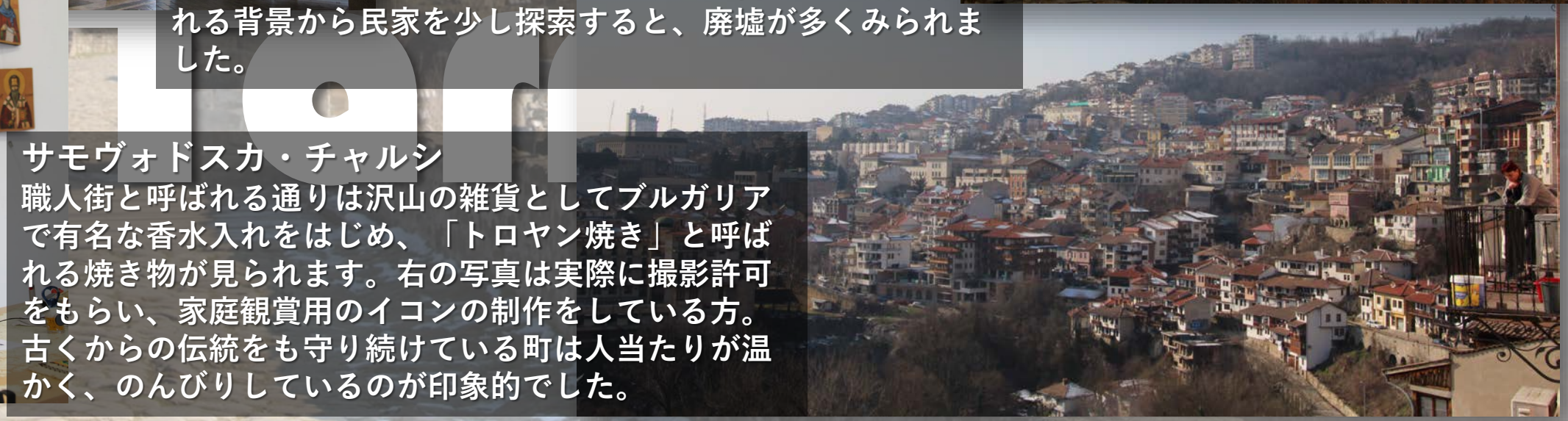
「大司教区教会：ツァレヴァレの丘」

旧共産主義の技法を思わせる硬派な絵コンテが特徴的に壁画として内部全体に描かれているこの教会。背景は昔、当時のオスマン帝国の猛攻によりがれきの山となった歴史がありました。城壁には未だに大砲や弓などが当時のまま展示されており、沢山の戦いの後が生々しく残る跡に凄惨な背景が思い浮かべられました。



石畳みの街並み

街を歩くと階段が多く、急峻な地形が特徴となります。石畳みは非常に荒く、時には陥没していたり抜けている場所を猫が寝床にしていたり。古くからある街で人口減も見られる背景から民家を少し探索すると、廃墟が多くみられました。

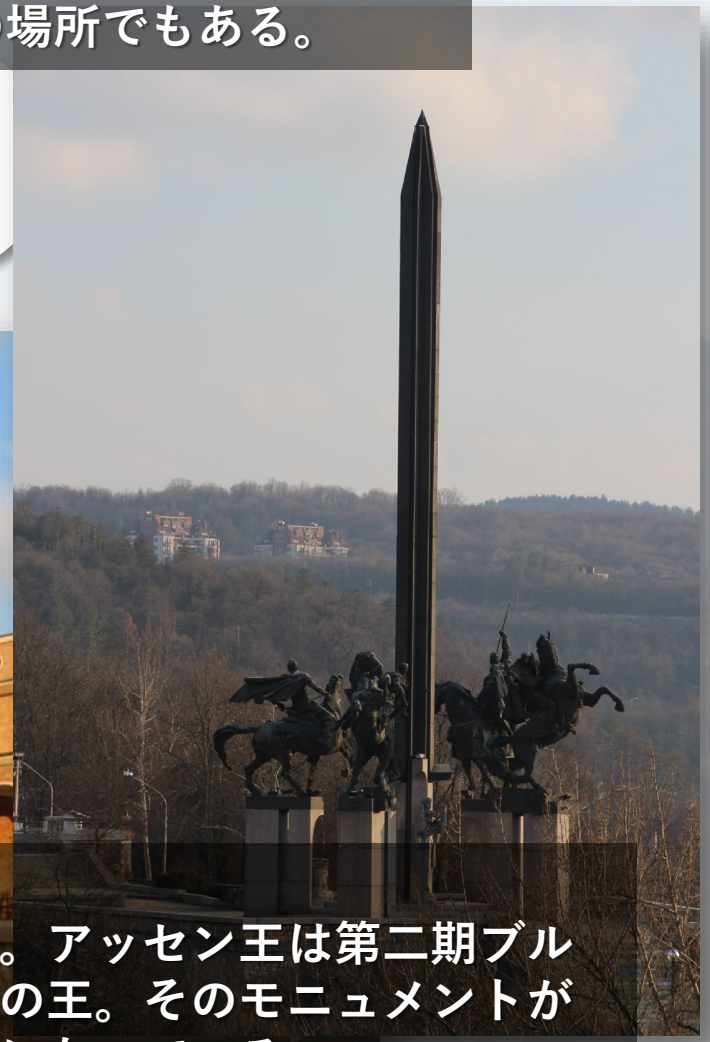


サモヴォドスカ・チャルシ

職人街と呼ばれる通りは沢山の雑貨としてブルガリアで有名な香水入れをはじめ、「トロヤン焼き」と呼ばれる焼き物が見られます。右の写真は実際に撮影許可をもらい、家庭観賞用のイコンの制作をしている方。古くからの伝統をも守り続けている町は人当たりが温かく、のんびりしているのが印象的でした。

聖ディミタル教会
訪問時冬季休業として閉まっていたので見学をすることができなかったが、この教会は第二期ブルガリア帝国の守護聖人に文字りつけられた教会。第二期ブルガリア帝国誕生の場所でもある。

40人教会
1230年にイヴァン・アッセン王2世によって建てられた。最近修復され、内部は当時の壁画が展示物としてライトアップされている。



ヴェリゴタルノヴォ博物館：アッセン王のモニュメント
非常に苦い思い出ではあるが、体調不良で訪れることができなかった博物館。アッセン王は第二期ブルガリア帝国時にビザンツ帝国を圧倒させるほどの権力をもたらしたこの土地の王。そのモニュメントがある町の中心の広場は、現在、丘の街を見上げるのに一番良い観光スポットになっている。

Kazanlak

2/15~2/18（カザンラク・シプカ）

移動日

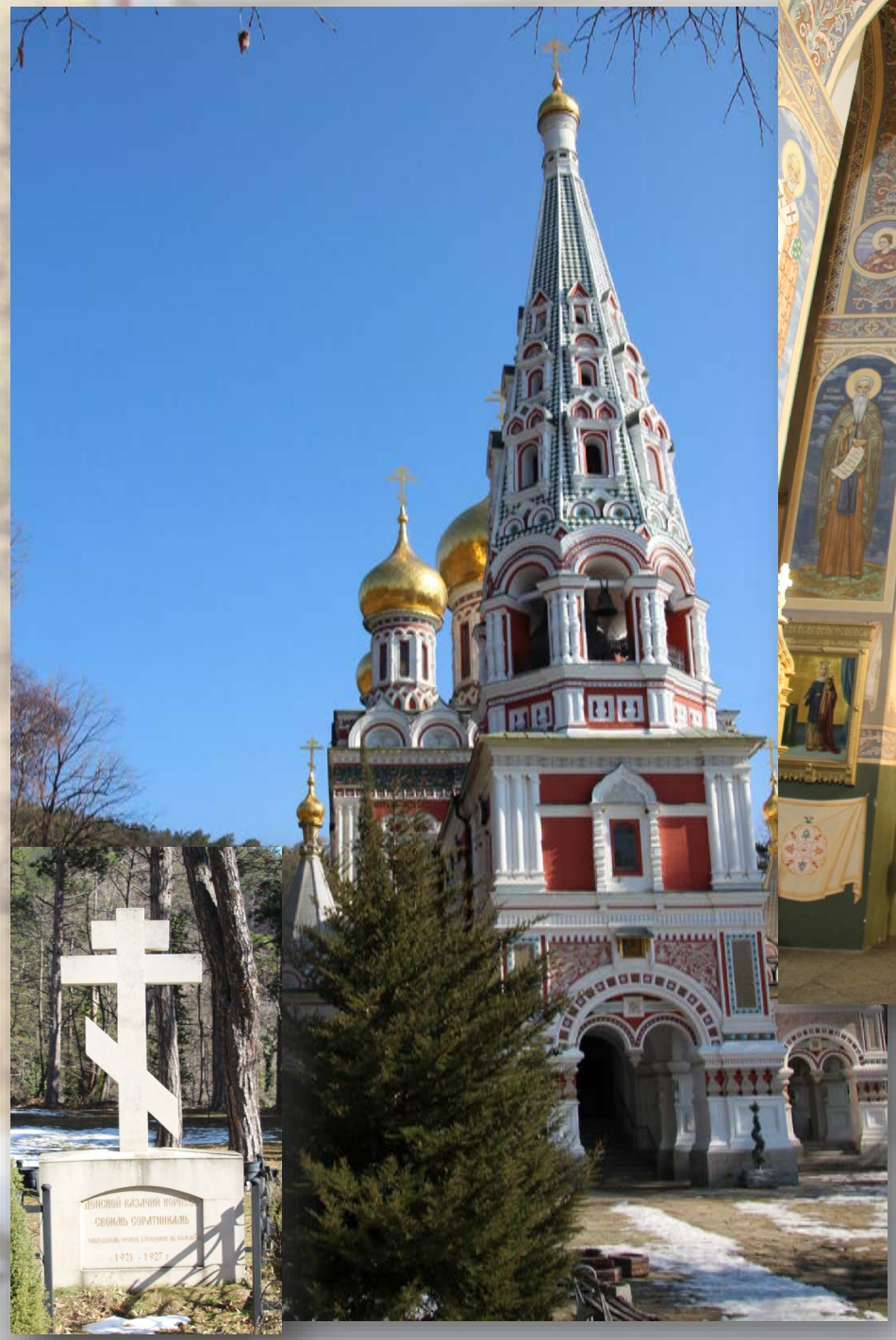
　待ちに待ったカザンラクはヴェリゴタルノヴォからバスで1時間20分ほど。一方通行しかない道のりを対向車と譲りながら進みます。1日1本しかないバス。乗れるか緊張しながらも無事到着。バスの中には出稼ぎに行く人や帰りのバスとして使う人がいて、観光客はあまりいませんでした

小さな町・カザンラク

　バスを降りるとホテルに向かいます。カザンラクはブルガリアのバラの生産地。
カザンラクは小さい街。しかし、5月には周辺諸国の民族が一挙に集まり民族舞踊で盛り上がる「バラ祭り」が始まります。
世界遺産としても「トラキア人の墓地」がある背景からブルガリアを支える町として有名。そして何よりもこの町では見たいものがありました。
ホテルに到着するとシングルルームで予約をしていたお部屋がスイートルームに変更されました。創造よりもはるかに大きい部屋になりながらも悪い気はしません。フロントに聞くと「日本人だから」と言われ、日本の偉大さに気づくことができました。す、、すごい。

トラキア人の墓地（世界遺産）

街の北東に向かうと少し丘を登った先に世界遺産が見えてきます。トラキア人墓地です。1944年に発見され、遺跡は紀元前4世紀から3世紀のものになっています。遺跡内は非常に小さく、中に入るには1人入るのにも十分な大きさ。壁画としてトラキア人のフレスコ画が装飾され、西洋美術の視点から技法自体がアルカイックのものであることがわかります。
入り口には世界遺産のガイドが売られるカウンターがあり、学生は入場料金が通常の半額で入ることができます（海外ゲストの場合でも可能）
壁画自体は物語形式として描かれ、右の画像はドーム状になったお墓内部の天井画。葬式の風景が描かれている。



シプカ僧院

シプカはカザンラクから10キロほど離れた小さな街。そこにかつて露土戦争で激戦地になったシプカという町があります。観光地シプカ僧院はブルガリア正教会の教会群でもかなり規模が大きい教会で、この教会は戦争慰霊の意も込めて建てられたもの。内部は黄金とイコンの装飾で豪華に飾り付けられ、外壁には至る所にモザイクが施されている。
ブルガリア正教の特徴的な八端十字はここで見る事ができる

Shipka

Buzludzha Monument

ブズルジャ・モニュメント
世界四大廃墟

私の夢

海外を最初に見るならここを見たい。漠然を夢を見て8年を経た2023年2月。私は死ぬまでに叶えたい夢を一つ叶えることができました。世界四大廃墟と名されるブズルジャは18年まで内部の立ち入りができた場所。現在は老朽化の影響で立ち入りはできません。カザンラクから20キロ。長かった最初の夢の果て。そこから得たエネルギーは、旧共産建築の代名詞と呼ばれること建物としてどこか力強く、反戦の火を灯すようなその風貌に、私はただ立ち尽くすだけでした。

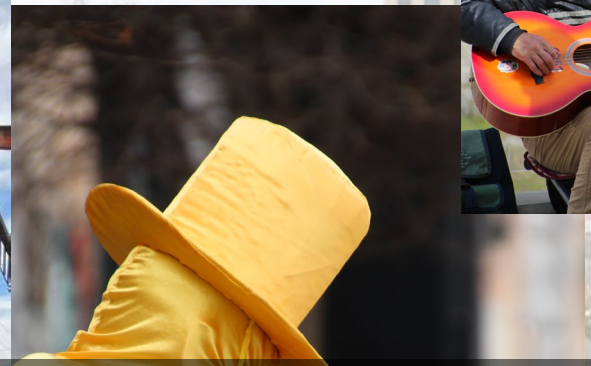
モニュメント背景（以降原文ママ）

かってブルガリアを主導した共産党の集会所である。14世紀末以降、ブルガリアはオスマン帝国に統治されていたが、19世紀末、ロシアの支援を受けた社会主義者を中心に反乱が勃発。このバズルージャ山で戦いが繰り広げられた。戦いに勝利したブルガリアはどうにか独立を果たしたが、1944年、今度はソ連がブルガリアへと復攻。共産党が主導するブルガリア人民共和国（ソ連衛星国）となる。そして81年、共産党は国を“救った英族（社会主義者）を称えるべく、この戦勝の地バズルージャにモニュメントを設置したのである。しかし89年、ソ連の衰退とともに共産党政権が崩壊すると、この建物もあっけなく廃棄された。最近では廃墟として有名になり、観光客が増えたことで、建物を修復し、歴史記念として再利用を訴える声もある。しかし、建設当時の暗い時代を知る人々は、必ずしも再利用に積極的でないという。ソ連崩壊後に生まれた若者の無邪気な悪数か、入口には赤いスプレーでこう殴り書きされている。"FORGET YOUR PAST”（過去を忘却せよ）。

参考：佐藤健寿、（2015年2月6日）「世界の廃墟」、(株)飛鳥新社　より

Plovdiv
together
plovdiv 2019

プロウディフ（2/18~2/22）



移動日・ローマの跡が残るプロウディフ

カザンラクからプロウディフへ。滞在中初の電車を使って約2時間の旅に出ます。プロウディフに着くとホテルに向かいます。ホテルのチェックインは3時から。着いたのは１時。行く当てもなくさまよっているとプロウディフは観光に特化した街なことに気づきます。ストリートパフォーマーが至る所に。朝から夜までいろんな楽器の音が響き渡ります。そしてレストラン。到着した日が暖かい日でもあり、滞在中は連日テラス席で昼から飲んでいる住民が続出。これがプロウディフ。一人には少し難易度が高い街。

プロウディフの街並み

プロウディフにはローマの跡が残されています。実はこの風景。もともとは競技場があった場所でした。第一回アテネオリンピックでは、短距離走にここのプロウディフの土地が採用されたとか。実際に遺跡の跡などがありましたが、現在は埋め立てられた場所も多々。しかし、古くから愛されていたプロウディフの街は、現在でも観光客をはじめ街の人々に愛される商店通り・飲み通りとして盛んに動き続けています。

ローマ劇場跡：東ローマ帝国時代の町々

画像は旧市街。その断崖にある半円形劇場は、3,000人も収容できる劇場となっており、赤に入ることができる。現在でもイベントやコンサートで使用されることもしばしばあり、背景のステージ段上は上ることもできた。野外で崖に面していることからプロウディフの街並みがとてもよく見え絶景だ。

ちょっと疑問に感じたこと

左：「桃太郎」プロウディフ
右：「日本人」カザンラク

日本で有名な琴欧州関がいるように、ブルガリアにも日本に由来するものがありました。象徴となること二つは姉妹都市として岡山県とプロウディフが結ばれた証のものであったり、カザンラクの「日本人」は舞妓さんをイメージして広島県福山市と連携し、ブルガリアの芸術家が制作したもの。他にもブルガリア以外と繋がっていそうなものがたくさんありました。
ブルガリアから世界中に発信していくものをもっと身近に見つけるために。
撮ってきたこれ以上の疑問を深め、よりブルガリアのことを知るきっかけにしていきたいです。

Sofia2

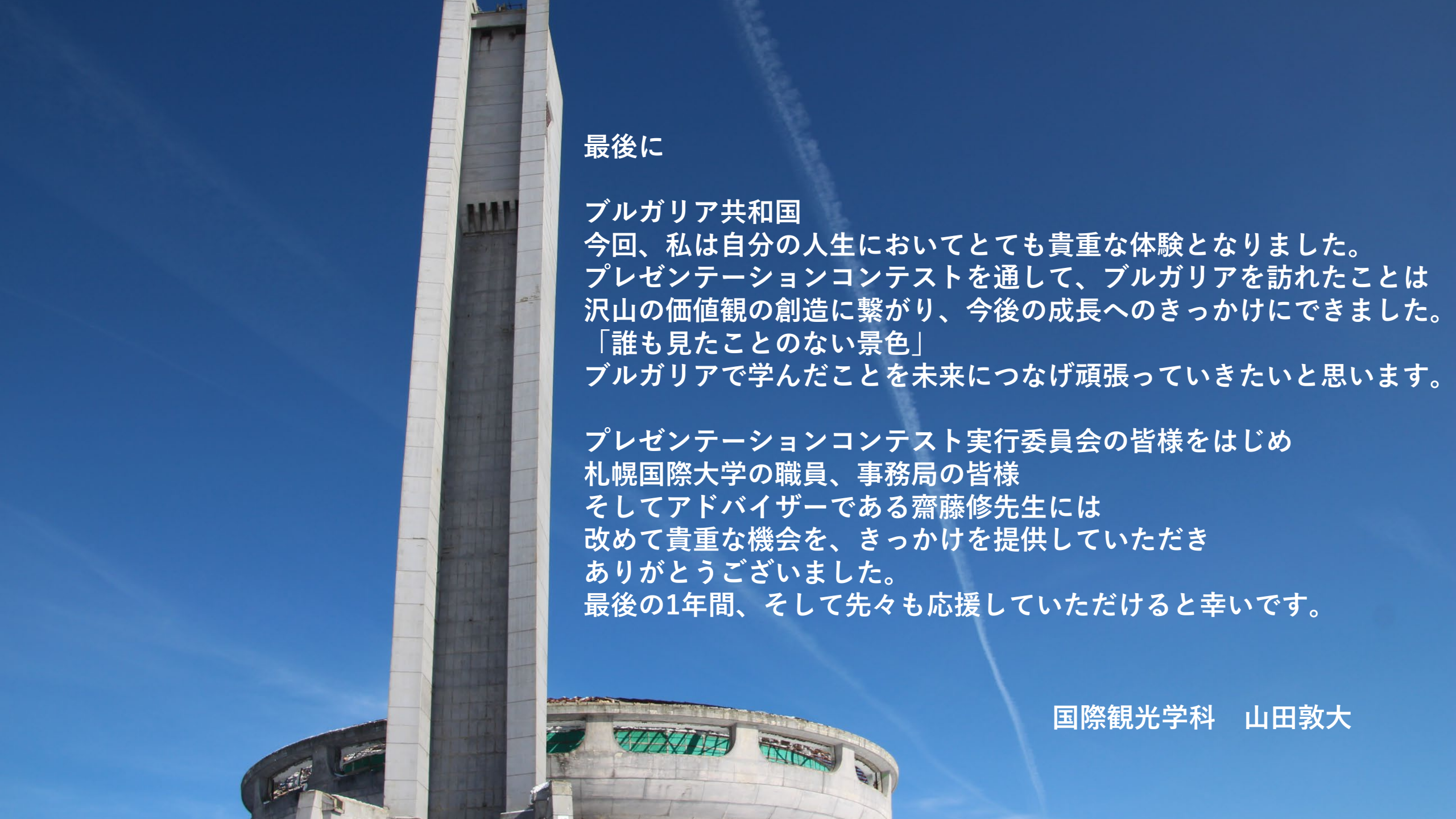
アレクサンドロネフスキー大聖堂

ブルガリアで最も存在感を放つ建物。それがアレクサンドロネフスキー大聖堂だ。
ドームの高さは約60mを誇り、ブルガリア最大。1882年に着工後40年の時を経てようやく完成した。ブルガリア独立のきっかけとなったこの建物は、もともと露土戦争で亡くなった20万人のロシア兵を悼んで作られたもの。
内部の装飾やシャンデリアの数々。そして、中央はロシア・右がブルガリア・左が東欧諸国にささげられたイコンは来る人の心に安寧と静寂をもたらしてくれる。
内部は周辺の交通機関の物音が一切遮断され、静かな空間が広がり、地下にはイコンを飾った博物館が併設されている。

リラの僧院（世界遺産）

ソフィアから2時間30分。南下して山間部リラ山脈を進むとリラの僧院が見えてきます。リラの僧院は世界遺産に登録され、ブルガリア正教会の総本山と言われています。内部の撮影は禁止。しかし外壁でもブルガリア正教を彩る素晴らしい装飾でした。内部は半分凍結しているほど寒いですが、ブルガリアーのシャンデリアは圧巻。ここでしか見られないブルガリア正教会としての文化が華開いた10世紀の年月から、時代を感じる屈指の観光地となっていました

Rila Monastery



最後に

ブルガリア共和国
今回、私は自分の人生においてとても貴重な体験となりました。
プレゼンテーションコンテストを通して、ブルガリアを訪れたことは
沢山の価値観の創造に繋がり、今後の成長へのきっかけにできました。
「誰も見たことのない景色」
ブルガリアで学んだことを未来につなげ頑張っていきたいと思います。

プレゼンテーションコンテスト実行委員会の皆様をはじめ
札幌国際大学の職員、事務局の皆様
そしてアドバイザーである齋藤修先生には
改めて貴重な機会を、きっかけを提供していただき
ありがとうございました。
最後の1年間、そして先々も応援していただけると幸いです。

国際観光学科　山田敦大